

## 発表テーマ がん教育を通して命について考える

### 1. はじめに

がん対策基本法（平成18年法律第98号）の下、政府が策定したがん対策推進基本計画（平成24年6月）において、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識をもつよう教育することを目指し、5年以内に、学校での教育の在り方を含め、健康教育全体の中で「がん」教育をどのようにするべきか検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする」とされた。また、文部科学省「学校におけるがん教育の在り方」について（報告）では、がん教育の目標を、「①がんについて正しく理解することができるようにする。②健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする。」としている。

当校では、新潟市のがん教育推進モデル校の指定を受け、令和元年度より6年生児童を対象にがん教育を実施してきた。このがん教育を通して、主体的に健康や命の大切さについて考えることのできる児童の姿を目指し、実践に取り組んできた。

### 2. 当校のがん教育の取組

当初、がん教育を先行実践していくためのよりどころとなったのが文科省から提示されている資料であった。しかし、それらの資料は押さえる知識が多くあり、必然的に講義的な授業になってしまった。そのため、児童の意欲が乏しく、目指す姿を達成することができなかった。

また、日頃から、メディアなどで「がん」の情報に触れる場面が多い今の社会において、児童にとって聞き馴染みのある病気であることに間違いない。

身近な人（家族や親戚）が闘病中であつたり、がんで亡くしたりした経験をもつ児童もいた。しかし、病気についての正しい知識をもつ児童は少なく、ただ「死んでしまう病気」「治らないこわい病気」と考えている児童が多くいた。さらに、「自分には関係がない病気」と、他人事として捉えている児童も少なくはない。

そこで、がんについての正しい知識を学ぶことで、がんは誰にでもなりうる身近な病気であり、決して他人事ではないことに気付かせ、自分事として真剣に考えられるようにしたいと考えた。また、自分の大切な人（家族）の健康や命の大切さについても主体的に考えられるようにすることが大切であると考えた。

そこで、学習内容を精選し、指導計画を工夫するようしてきた。取組は以下の3つである。

- ① 事前に保健「病気の予防」でたばこや飲酒、生活習慣病等とがんの関連を図る。
- ② がん教育を行う前に、職員間で配慮事項の確認と保護者に実施通知をする。
- ③ 保健体育のみでなく、道徳や学活を含め横断的に学習を進める。

### 3. 実践概要

(1) 指導計画 体育科保健領域、特別活動、道徳を組み合わせた指導計画とした。

時間	主な学習活動
1 (保)	<ul style="list-style-type: none"><li>・ がんのしくみや原因、がんは誰にでもなりうる病気であることを知る。</li><li>・ 生活習慣に配慮することでがんになる危険性を減らせることを学ぶ。</li></ul>
2 (保)	<ul style="list-style-type: none"><li>・ がん検診を受けることの大切さを知る。</li><li>・ がん検診受診率が低い理由を考える。</li></ul>
3 (学)	<ul style="list-style-type: none"><li>・ これまでの学習やがん経験者のメッセージなどから、命の大切さを考える。</li><li>・ 大切な人へ命の大切さを伝える手紙を書く。</li></ul>
4 (道)	<ul style="list-style-type: none"><li>・ がん経験者のメッセージを聞き、これからの自分の生き方について考える。</li></ul>

脚注：(保)は体育科保健領域、(学)は特別活動における学級活動、(道)は道徳を示す。

#### (2) 実践の方法

- ①実施時期 令和3年11月
- ②対象児童 新潟市立大形小学校 6年生
- ③配慮事項 配慮を要する児童は以下の通り。(個への配慮については個人差あり。)
  - ア) 小児がんにかかったことがある。
  - イ) 家族や親近者ががん患者がいる。または、がんで亡くした経験がある。
  - ウ) がん以外の重病や難病に罹患した(罹患している)。

がん教育を実施するにあたって、職員全員で児童への対応を共通理解し、全ての児童が安心して授業に参加できるようにする。また、参加できない場合は、無理に参加させないようにする。

#### (3) 具体的な実践内容

##### ①1時間目「がんとはどんな病気だろう」(保健体育)

がんの基本的な知識を学び、がんになる危険性を減らすためにはどのような生活が望ましいかを考えさせた。スライド教材を活用し、がんは身近な病気であることや誰にでもなりうる病気であることを確認させ、日ごろからの望ましい生活習慣でがんになる危険性を減らすことができることに気付かせることができた。児童は、学習前はがんに対して「こわい」「つらい」などのマイナスイメージをもっていたが、生活習慣を整えることでその危険性を減らすことができることもあると知り、自分の生活を見直し、改めたいという気持ちが高まったようである。授業の初めは「他人事」として捉えていた児童が、がんは誰にでもなりうる病気と学んだことで、「自分事」として捉えるようになった。



##### ②2時間目「がん検診について知ろう」(保健体育)

###### 【児童の振り返り】

- ・ 日本人の二人に一人ががんになって、三人に一人が死んでしまう病気であることを知って、改めて規則正しい生活を送ろうと思いました。
- ・ がんは生活習慣が乱れたりバランスの良い食事がとれていなかったりするとなりやすいことが分かった。これからはバランスの良い食事に気を付けたい。

がん検診にはどのような良さがあるのか、受診率の現状などについて学習した。スライド教材を活用し、早期発見で9割以上の方が治ることを示すと、児童はその高い確率に驚きを隠せない様子だった。

また、がん検診の受診の啓発ポスターから、医療機関やサバイバーが積極的にがん検診の受診を呼び掛け

ているのは、なぜか話し合わせた。児童は、「多くの人に検診を受けてほしいのだと思う。」「みんなにつらい思いをしてほしくないから検診を受けてもらいたいのだと思う。」など、検診を受けることが大切だと気付くことができた。



#### 【児童の振り返り】

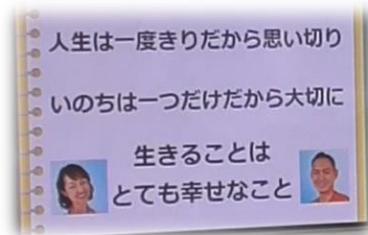
- ・ 検診で早くにがんを見つけて早く治療ができれば95%も治せることにびっくりしました。
- ・ 検診は料金も安くて手軽に受けられるから、家に帰ったら家族に教えたいです。もし、検診を受けていなかったら、受けてほしいです。

振り返りには、学習したことを家に帰って家族にも伝えたい、自分の家族は検診を受けているか聞いてみたいといった内容が多くみられた。これまで「自分事」として捉えていた児童が、次第に「自分事に加えて、自分の家族や身近な大切な人を思う気持ち」に考えが変わっていったのを感じた。

#### ③3時間目「私たちにできることを考えよう」(学級活動)

これまでの2時間に学んできたことを、自分の大切な人に伝えるためには、どのようなことを伝えたいかを考えさせた。

まず、がん検診は手軽に受けられて多くのメリットがあるにも関わらず、受診率は50%にも達していないことを示し、その理由を考えさせた。「忙しくて検診に行く時間がない」「今は元気だから心配ないと思っている」「どこで検診を行っているか知らない」など、検診に行こうと思えば行ける理由が多いことに気付くさせることができた。もし、自分の大切な人ががん検診を受けていなかったとしたら、児童は、絶対に検診に行ってもらいたいと答え、そこで、家族や大切な人に、「検診に行ってみよう」「がん検診って大切だから行こう」という気持ちになってもらうために自分ができることは何かを考えさせた。児童から、「手紙を書いて伝えよう」という声が上がったため、何を伝えたらよいか、伝えたい言葉やキーワードについてタブレットを活用して全員で共有できるようにした。(写真右中央)。家族に対する感謝の言葉や検診に行ってもらいたいという思い、ずっと元気でいてほしいという気持ち、命を大切にしてほしいなど相手を思う気持ちが多くあった。終盤には、がんサバイバーの言葉(写真右下)を伝えることで、より「命の大切さ」を実感できたようである。



授業を通して「自分事」から、「大切な人に対する気持ち」の方が大きくなっていったように感じた。

#### 【児童の振り返り】

- ・ 自分の家族にはがんになってほしくないと思いました。がん検診でもしがんが見つかったら、早ければ治る確率が高いので安心しました。親には長生きをしてほしいです。
- ・ もっとがんの知識を知ってそのことを大切な人たちに伝えて、みんなで健康で楽しい生活を送りたいです。
- ・ 自分も周りの人も幸せになるといいと思ったので、両親を説得してがん検診を受けに行ってもらおうと思います。

保護者からは、『私も自分の生活を見直そうと思いました。がん教育は小学生にはまだ早いのではないかと感じていましたが、健康の大切さや命の大切さについて家族で考えるきっかけになったので、大切な学習だと考えさせられました。』『日頃からの生活習慣に気を付けていこうと家族で話し合いました。子どものこ

ろから健康な生活を心掛けるように習慣付けるためにも必要なのだと思いました。』といった、がん教育に肯定的な意見や検診に興味をもったり受診に行こうと考えたりと、がん検診に前向きな意見が多く聞かれた。

#### ④ 4時間目「自分の生き方について考えよう」(道徳)

がん経験者の話を聞くことや過去の自分と未来の自分を見つめることで、「自分の生き方」について深く考えられるように、道徳を行った。

まず、がんサバイバーである新潟医療福祉大学の五十嵐紀子先生から児童へ向けたメッセージ(動画)を視聴し、どう感じたかを話し合ったり、これまでやこれからの自分について考えたりした。



これまで、何でも一人で抱え込んでしまっていた自分に気付いたこと、これからはもっと周りの人に頼っていいかなと思えたこと、自分のやりたいことに一生懸命になれるのはとてもすてきだと気付いたことなど、一人一人が自分自身を見つめ、考えることができた。

4時間の授業全体を通して、常に「なぜがんについて学ぶのか」と問いかけ、考えさせていた。がんについての正しい知識を学んで終わるのではなく、その後の行動がこれからの運命を変えられること、学んだことを行動に移すことで大切な命を守っていけることを伝えていた。「あなたにできることがある。あなただからできることがある。あなたにしかできないことがある。」「かけがえのない命を大切に、自分らしい人生を送ってほしい。」という願いを込めて授業を行った。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果と考察

- ・ 既習事項である生活習慣病と関連させ、望ましい生活習慣でがんになる危険性を減らせることに気付かせることができた。初めは、がんについて「こわい」「かかりたくない」「自分には関係がない」など、どこか他人事のように感じていた児童も少なくなかったが、がんは誰にでもなりうる身近な病気であることを知り、次第に自分事として捉えて学習に臨む姿が見られた。
- ・ がん検診には多くの良さがあるにも関わらず、現状ではがん検診の受診率が低いことを示すと、驚きを隠せない様子が見られ、必ずがん検診を受けたいと学習を振り返る児童も多くみられた。本実践ではがん検診の有効性や受診率の提示の仕方が効果的であったと考えられる。
- ・ 児童一人一人が、学んだことを生かして、大切な人に向けた手紙を書く活動において「いつもぼくたちのために働いてくれてありがとう」「自分の体を大切にしてほしい」「がん検診を受けてほしい」「ずっと一緒にいたいです」など、相手を思う気持ちが表れていた。学んだことを表現するために「大切な人への手紙」の学習活動が有効であった。
- ・ 命の大切さについて実感できるように「自分→大切な人→自分の生き方」と考えられる単元を構成したことで、児童は「自分事」に加え、「自分の大切な人」の事としても考えるようになっていった。
- ・ 小学生でもがんについてより深く学ぶことができ、命の大切さについても真剣に考える姿が見られた要因として、難しい言葉を分かりやすく説明したりスライドの提示方法や授業展開の工夫をしたりしたことがあげられる。

### (2) 課題

- ・ 6年担任の誰もががん教育を実施できるような校内体制、教員の異動等があっても持続可能な授業づくりについて考えていかなければならない。また、ゲストティーチャーや外部講師の活用の可能性について、時数の確保や評価の在り方についても今後検討していく必要がある。

## 5. 参考文献 学校におけるがん教育の在り方について 報告 平成27年3月 文部科学省

学校におけるがん教育の手引き 平成31年2月 新潟県教育委員会

【スライドや資料等のお問い合わせ：大形小学校 駒沢 [rieko01-komazawa@city-niigata.ed.jp](mailto:rieko01-komazawa@city-niigata.ed.jp)】